



# ボヘミアン・ ラブソディ

12月10日

Sudden Fiction Project

高階 經啓  
hirotakashina

## 12月10日のおはなし「ボヘミアン・ラブソディ」

コジマというのはワグナーの妻の名前だったのだろうか。確かお互い再婚なのだが、コジマは前の結婚を解消する前からワグナーと付き合い始めて、子どもまで生んでしまったという強者ではなかったか。イタリア風の名前だがイタリア人ではなく、イタリア生まれのドイツ人か何かではなかったか。

けれど目の前のコジマ嬢はそんな過激なレディーには見えない。確かに勝ち気そうではあるけれど、そういう激情のままに行動する人には見えない。ちなみにドイツ人にもイタリア人にも見えない。ロシア人にも見えないし、だからと言ってアジア人や黒人なのかということもそうも見えない。そのくせどこかで見たことがある気もする顔立ちをしている。国籍も不詳なら年齢も不詳、ただガイドとしては優秀だ。非常に優秀だ。もちろんあたしはロシア語は母語ではないから、そんなにきちんと聞き取れているとも思わないけど、彼女の解説は簡潔にして要点を押さえ、しかも独特のユーモアをたたえていた。

名所旧跡での解説や、バスの中でのトークだけではない。気分の悪そうな人が出たときの対処の仕方、夕食のレストランでオーダーの取り違えが起きたときの交渉など、見ていてほれぼれするようなさばき方だ。サンクトペテルブルクからの団体旅行客はみな、コジマにすべてを委ねれば安心と思っていた。

一晩、彼女の泊まる部屋を訪ねて話を聞いた。サハリン州をめぐる旅も面白かったが、あたしはむしろコジマというキャラクターに興味を持ったのである。ウオッカを飲みながら話していて、あたしがむしろ英語の方が得意とわかってからは彼女は英語に切り替えてくれた。

ロシアは彼女にとって10カ国目の拠点だという話。ヨーロッパはスペインを皮切りにフランス、イタリア、ギリシャ、トルコ、旧ユーゴスラビア、ハンガリー、旧チェコスロバキア、旧東ドイツ、ルーマニアと渡り歩いたのだという。臨機応援の対応能力は全くの異人として各国を渡り歩くことで身についたという。

「あなたもずいぶん世界中渡り歩いているじゃない」コジマが言う。「パスポート見たよ」「ただの旅行だから」あたしはあわてて否定する。「実際に住むのとは全然違う」「そうね。でもあなた、面白いところ回ってる。まるで」コジマはちょっと目を細めて言う。「まるで、そう。大航海時代みたい」「大航海時代！」あたしは受ける。「じゃあ大航海時代に乾杯！」

お互い酔っぱらってきて、だんだん話している時間よりも馬鹿笑いをしている時間の方が長くなってきた。あたしがコジマを引き合いに出して彼女の恋愛関係を問いつめたとき、そのフレーズが飛び出した。「ノー！ノー！ノー！ノー！ノー！ノー！ノー！」ヘンな音程をつけると思ったらこう続けた。「オー、ママミヤ、ママミヤ、マ間宮海峡」

日本語だった。あっこいつは！ その途端に思い出した。こいつはコジマだ。中学時代の同級生のコジマだ。「間宮海峡」はコジマの口癖だった。もちろん元ネタはクイーンの「ボヘミアン・ラブソディ」終盤近い一節だ。正しくは「ママミーア、ママミーア、ママミーア、レットミーゴー」となるところだが。

「コジマ！」つい声を張り上げてしまった。もちろん日本語で。「あんたコジマ？」「だけんコジマって言っとっと！」いきなりコジマは長崎弁になって言った。「やっぱユリのごたる。こっちも似とうな～って。ばってんこげんところで、ねえ」

旧友の再会。翌日はサハリン側から間宮海峡を見学した。もっともコジマは間宮海峡とは別な名前で呼んだ。ここに海峡があることを発見した間宮林蔵に敬意を表してシーボルトが「間宮

海峡」の名前で世界に紹介したものの、国際的には採用されず「タタール海峡」と呼ぶようになったらしい。

海峡を眺めながら彼女に尋ねた。もちろん日本語で。

「あんた、ひょっとして間宮海峡に来たいからこの仕事に着いたの？ あの歌、歌うために？」

「まさか」コジマは笑った。「あんたこそどうしてこんなところへ？」

「ちょっとしたついでに」

そう。厳密に言うところにはひいおじいちゃんゆかりの地ではない。ひいおじいちゃんはオランダ人の振りをして鎖国中の日本にまんまと忍び込んだ。本当は神聖ローマ帝国で生まれ育ったドイツ人だったのに。オランダから、喜望峰を回ってジャワ島、長崎の出島と渡り歩いたひいおじいちゃんは、ひいおばあちゃんとの間に子どもをもうけた。32歳の時に日本から追放されて、帰国。49歳になってドイツ人女性と結婚し、3男2女をもうけ、ロシアに招かれたりもした。

その時代に地球の裏側に行くのってどんな気分だったんだろう。49歳で結婚するまで何を考えていたんだろう。日本に残したひいおばあちゃんや娘のことはどう思っていたんだろう。恨むとか何とか、あたしには別に含むところはない。ただすごく単純に知りたいだけ。だからコジマほどではないが、わたしも各国を渡り歩きひいおじいちゃんの軌跡を訪ね回っている。

「ちょっとしたついで？」コジマが笑う。「フィリップ・フランツ・フォン・ズィーボルトのひまごが？」

(「間宮海峡」 ordered by エルスケン-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

## 感謝の言葉と、お願い&お誘い

---

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

## ボヘミアン・ラブソディ

<http://p.booklog.jp/book/39948>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/39948>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/39948>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社paperboy&co.